

コロナ禍における学内介護実習教育の評価 —学生アンケートの結果から—

Evaluation of On-campus Care Training at Corona Disaster —From the Results of the Student Questionnaire—

森永 夕美
MORINAGA Yumi

キーワード：介護実習，学内実習，グループワーク，新型コロナウイルス感染症
Key Words：Care Training， On-campus Care Training， Group Work， COVID-19

1. はじめに

2020年度は新学期早々に新型コロナウイルス感染症拡大防止のため緊急事態宣言が出され、授業も遠隔での実施となった。6月には対面授業を再開できたが、介護福祉士養成の主な実習施設は高齢者施設である。感染すると重症化する可能性が高く家族との面会も停止している状況であり、実習生を受け入れられないとの申し出が相次いだ。そのため、6月に予定していた介護実習Ⅰ①は中止となった。しかし、夏になっても感染は収束するどころか再度拡大をみせ、介護実習Ⅰ②も実施が困難な状況となった。このような状況は全国の介護福祉士養成施設でも同じとみられ、文部科学省・厚生労働省から、実習施設等の代替が困難である場合、実習に代えて演習または学内実習等でもよいとの通達¹⁾が届いた。実習の延期を決断するには新型コロナウイルス感染症がいつ収束するのかも不透明であり、2年間の限られた時間のなかで450時間の実習を終えるには、この1回生の時期に学内での実習を終えておく必要があると判断し、学内で代替実習を行うこととした。

今回、初めて実施した学内実習について、実習終了後に行った学生へのアンケートの結果からは満足度が高く良好な反応が得られた。本研究では、それぞれの結果を報告するとともに、実習では欠かせないグループワークや実際の施設を想定して行った模擬施設実習について考察し、今後の代替実習の課題を検討する。

2. 研究目的と方法

2-1 研究目的

学内実習という初めての試みに対し、実習終了後の学生へのアンケート調査から、介護実習Ⅰとしての目的・目標を果たしたか振り返りを行う。

生活福祉コースの介護実習Ⅰの目的・目標は以下の通りである²⁾。

目的

介護実習Ⅰ①

- 利用者が利用している介護サービスについて理解する。
- 利用者の生活の場である介護現場において、利用者とのコミュニケーションを実践し、介護対象について理解を深める。

介護実習Ⅰ②

- 利用者の生活の場である介護現場を理解する。
- 利用者とのコミュニケーションを図ったり、表情や行動を観察したりして、利用者の願いや思いに気づく。
- 利用者に対する基本的な日常生活支援について見学し、利用者一人一人に応じた生活支援技術について理解する。

目標

介護実習 I ①

1. 介護保険における介護サービスの役割について説明できる。
2. 利用者とコミュニケーションを図り，利用者の日常生活の楽しみについて理解している。

介護実習 I ②

1. 利用者のくらしの場である介護現場について説明できる。
2. 場面に応じた適切な生活支援技術およびコミュニケーション技術を理解している。
3. 利用者のくらしや生活歴の違い・生活上の楽しみなど「その人らしさ」を尊重できる。

2-2 調査対象と方法

調査対象：介護福祉士養成課程に所属する 1 回生 19 名

(内訳：男性 6 名 女性 13 名 ，日本人学生 7 名 留学生 12 名)

実習期間：介護実習 I ② 2020 年 8 月 25 日～9 月 15 日のうちの 15 日間

(介護実習 I ②の 12 日間に未実施の介護実習 I ①の 3 日間分を含む)

アンケート実施日：2020 年 9 月 16 日 (介護総合演習 I)

調査方法：Google フォームによるアンケート調査 (選択式と記述式)

分析方法：選択式は単純集計にて結果を比較した。

記述されたものについては評価の参考として一部紹介している。

2-3 倫理的配慮

アンケートを実施するにあたり，今後の授業改善のためのアンケートであること，回答した内容が実習の成績評価に影響することはないこと，授業研究検討のためアンケートの結果を集計し，書かれた意見などは，個人の名前が分からないようにして報告発表することを口頭で学生に説明した。また，Google フォームのアンケートの最初にも説明文を記載し，理解した者はチェックを入れるよう指示した。

3. 研究の結果

3-1 学内実習全般について

今回の学内実習について，学生の取り組み具合 (実習に対する自分の頑張り) について質問した。その結果，非常に満足 16%，満足 47%，普通 37% という結果であった (図 1)。

非常に満足・満足を合わせ 63%の結果に，学生は初めての实習に対する自分の頑張りを高く評価している。

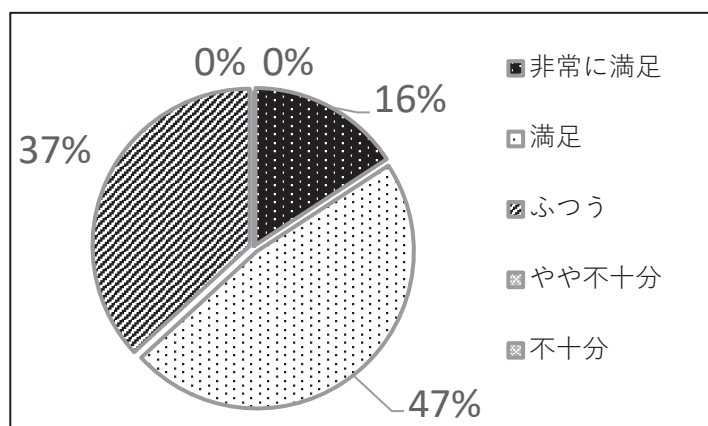


図 1 今回の学内実習に対しての取り組み度

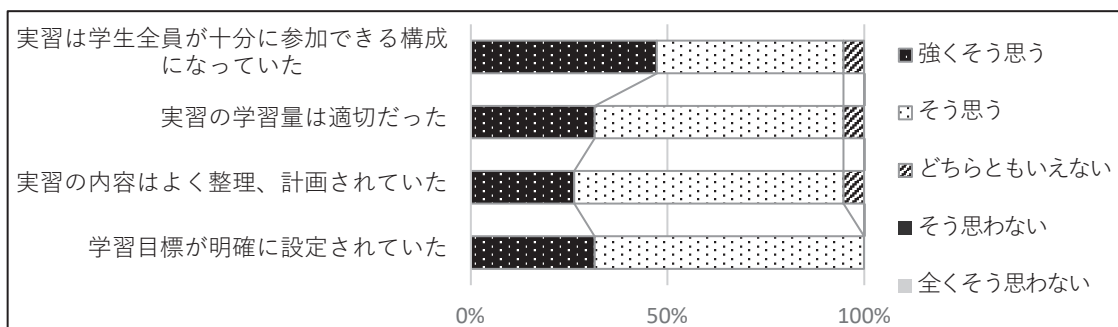


図 2 実習の内容

次に、実習の内容についても質問した。こちらとしては初めての試みであり十分に実習として応えられる内容かどうか不安があったが、結果からは学生にとって適量であったと評価できる（図2）。

また、教員のスキルと対応について質問を行った。こちらも概ね良好な結果であった。しかし、「毎日の課題は興味・関心をかき立てた」は他と比較して低いため、演習課題の内容については、今後再び学内実習となれば検討する必要があると考える（図3）。

3-2 学内実習の学習効果について

(1) 模擬施設実習

実習目標である「利用者とコミュニケーションを図り、利用者の日常生活の楽しみについて理解している」や「場面に応じた適切な生活支援技術およびコミュニケーション技術を理解している」を達成するために、期間中に2回、模擬施設実習として実際の施設内を想定しての授業を行った。学内の教職員に利用者役を依頼し、2回生には施設職員の先輩役として1回生への指導・助言を担当してもらった。結果としては、1回目より2回目で満足度が高かった（図4）。この変化については、学生自身2回目の方が要領をつかみ、より積極的に取り組むことができた結果と考える。そのことは、学生の評価理由記述からもうかがえる（評価理由記述1）。

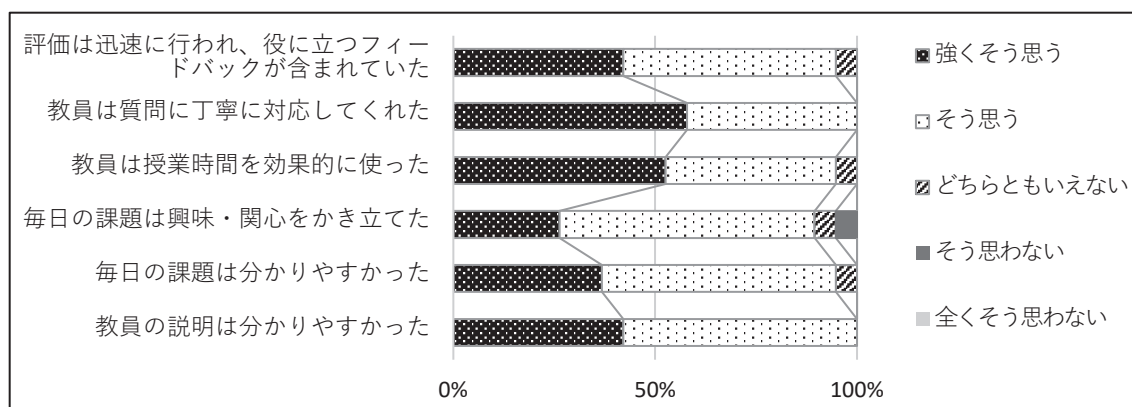


図3 教員のスキルと対応

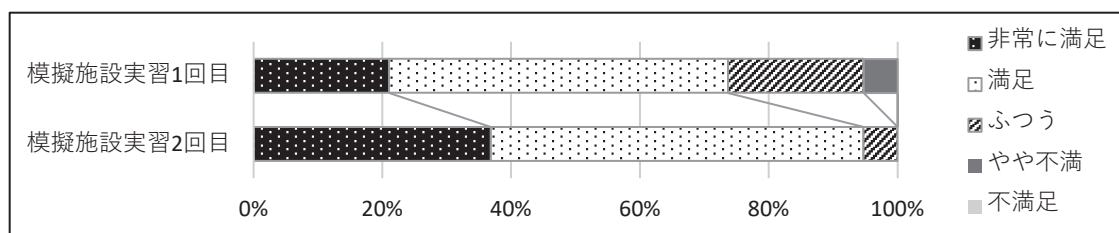


図4 模擬施設実習について

評価理由記述1 模擬施設実習について（一部抜粋）

- ・初めての实習ということもあり、いきなりやってみようというのは不安があった。でも、自分のやり方を先輩方に見せるチャンスがあり、そのやり方についてのアドバイスや指摘をすぐに聞くことができたのでとても良かった。
- ・1回目の模擬施設実習では自分で頑張ることが足りなかった。学びとか十分理解できなかったけど、2回目の模擬施設実習では、だんだんできるようになってきた。先輩から教えてもらえる時間があり何回も練習できるし、自立支援、コミュニケーションを図れるし、以前できなかったことができるようになった。
- ・工夫して模擬施設をつくって素晴らしいと感じました。施設的环境もしっかり整っていてイメージできました。さらに、2日間の模擬施設で実習を行ったけど、利用者は色々な人がおられました。模擬施設で実習を行うと、コミュニケーション能力を高めるだけでなく、技術の方法も勉強になりました。

模擬実習での2回生の対応についても質問した。2回生の指示・説明については満足度が高いが、態度・言葉遣いについては少し満足度が下がる(図5)。しかし、学生の評価理由記述からは2回生への感謝の声が多くみられた(評価理由記述2)。

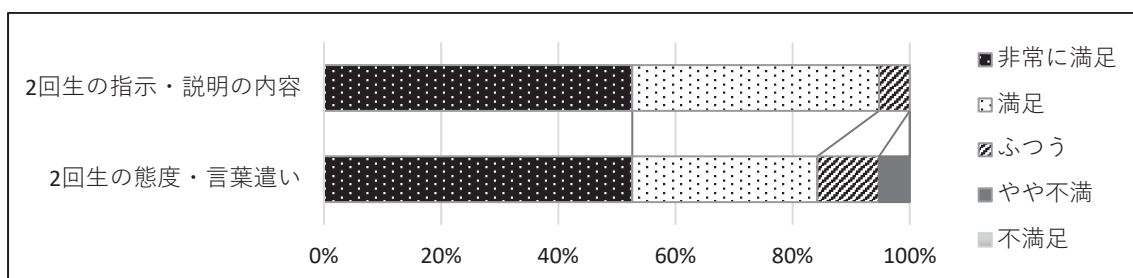


図5 模擬実習での2回生の対応について

評価理由記述2 模擬実習での2回生の対応について(一部抜粋)

- ・2回生の方にはたくさん質問や疑問をぶつけることができる環境で、解決したことがたくさんありました。ですが、内容はわかりやすいものもあればわかりにくいものもありました。丁寧な説明だったので聞きやすかったです。
- ・私は先輩に頼りすぎてもダメだと思いました。
- ・声かけの介助の面で利用者に良い言葉を言おうとし、言いたいことがまとまらず、考え過ぎるあまりどうしたら良いかと不安になり、グループ内で相談させてもらった。その際、2回生の2人の先輩方から適切な情報とポイント、アドバイスなどを頂き、心の中のモヤモヤ感がスッキリし後期の実習に活かせると思った。
- ・2日間は長い時間ではありませんが、本当に色々勉強になりました。いつも優しくアドバイスし、詳しく説明し、分かりやすい言葉を使って説明してくれました。2回生方と同じように頑張りたいと思います。

(2) 視聴覚教材の使用

実習目標の「利用者のくらしや生活歴の違い・生活上の楽しみなど『その人らしさ』を尊重できる」を学ぶには実際に利用者に関わるのが不可欠であるが、今回は利用者を理解する方法として視聴覚教材を多く活用した。学生の評価理由記述とあわせた結果から、こちらの意図は伝わったと評価できる(図6)(評価理由記述3)。

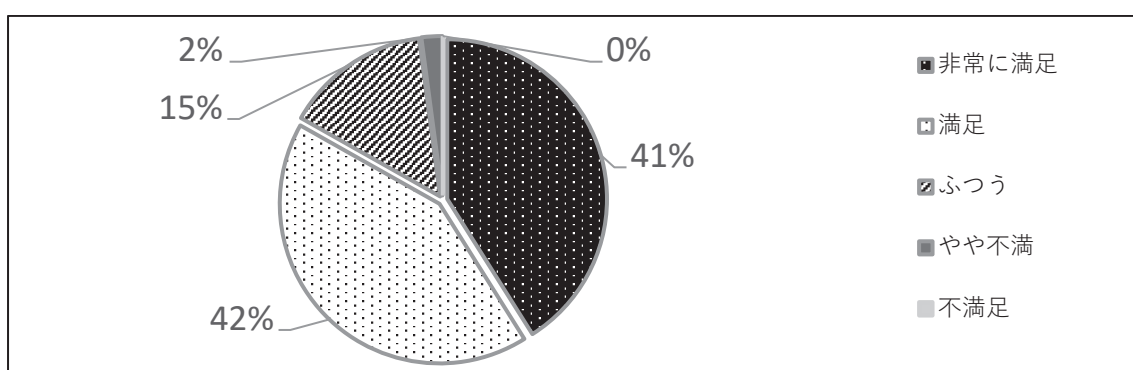


図6 視聴覚教材の使用について

評価理由記述3 視聴覚教材の使用について(一部抜粋)

- ・映画やビデオを見たことによって、利用者に対する接し方や今の介護の現状について理解することができた。初めて知ることもあり、興味を持って見れた。
- ・色々なビデオを見るのはよかったですと感じました。泣いたり、笑ったり、色々な気持ちを込めました。やはり、障がい者でも幸せな生活を送りたいと感じる人が多いからこそ、自分は将来、人に役に立つ仕事を続けたいと思います。

(3) 実習施設からの講演（ゲストスピーカー）

目標の「介護保険における介護サービスの役割について説明できる」や「利用者のくらしの場である施設の特徴について説明できる」については、施設から施設管理者や実習指導者にゲストスピーカーとして来学していただき、それぞれのテーマの講演を聞き学ぶこととした。留学生が多いクラスのため、どの程度理解できるか不安はあったが、おおむね内容に満足したとの評価であった（図7）。

実際の施設で経験して学ぶ機会はなかったが、学生の評価理由記述からも各講演での学びが多かったことがうかがえる（評価理由記述4）。

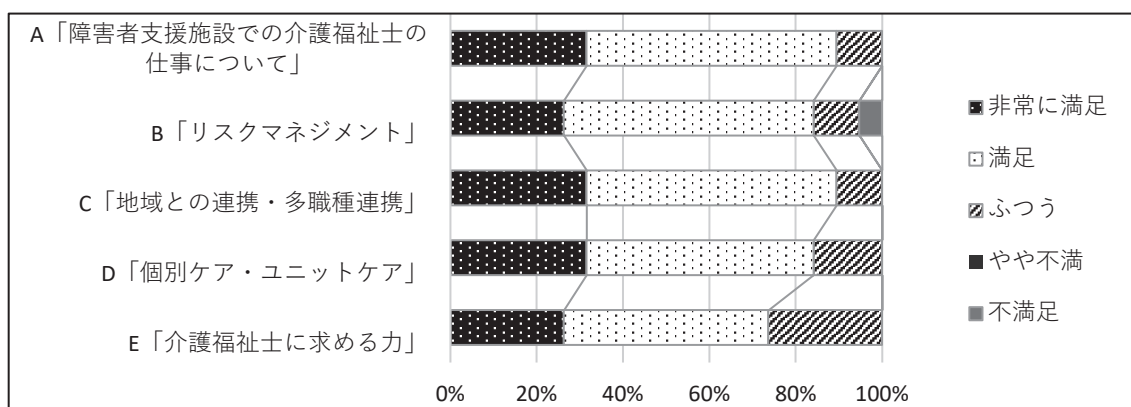


図7 ゲストスピーカーの講演について

評価理由記述4 ゲストスピーカーの講演について（一部抜粋）

- ・ 入所・入居の言葉の意味の違いや使い方、利用者ができることを見つける、その人の思いを叶える、背景を観察するだけでなく洞察し、接していかなければならないこと、実際にやって頂き、適切な情報と大事なポイントを正しく理解できた。
- ・ ゲストスピーカーから色々な情報を収集できました。施設によって、対象も違うと気づきました。障がい者施設もあるし、お年寄りの施設などもあります。講義によって、内容が違うけれど、福祉関係の仕事なので、勉強しないと難しいかなと考えました。
- ・ 今回の実習は行けなくなったので、介護現場の1日の流れや仕事をしっかり把握できてよかったと思います。

(4) グループワーク課題と個人課題

学外での実習は数人のグループで行くためチームワークが重要となる。今回の実習では、グループワークで施設理解、利用者の生活の理解、病気や障害について理解を深める学習を行った（図8）。

学生の評価理由記述からは、彼らがこの実習期間中に様々な課題にグループで取り組み、関係性の構築に悩んだことがうかがえる（評価理由記述5）。

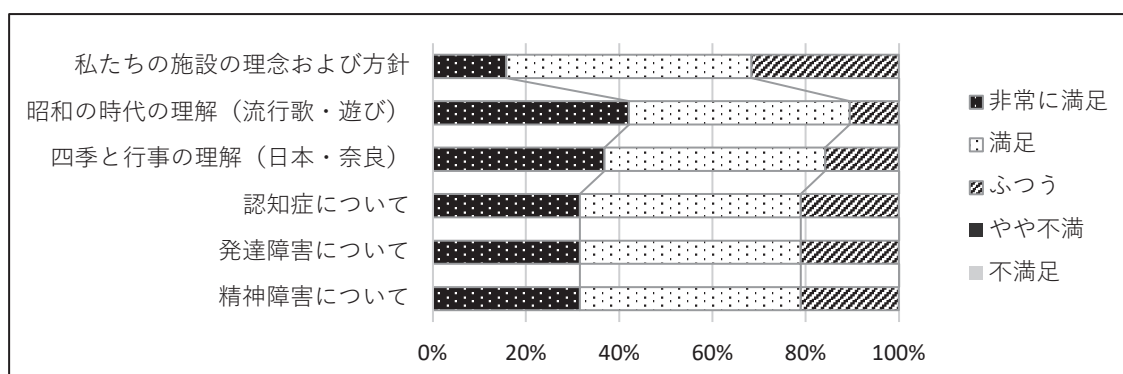


図8 グループワーク課題について

評価理由記述 5 グループワークについて（一部抜粋）

- ・グループワークでメンバーがしっかり意見を出さなかったから、グループワークの効果はなかなか出てこなかったと感じました。課題があると、いつも「私はどれでもいいから」と答えた人が多いので、もし誰にも同じ「私はどれでもいいから」と答えると、課題の解決はどうすると考えました。今後、もしグループで活動したら、メンバーと協力して、課題を解決できたらいいと思います。
- ・グループ課題では、役割や担当を決めて、上手く連携しながら学習できたと思います。また、責任感を持ちながら取り組むことができたので満足しています。
- ・最初、自分の考えや意見を言えないし、他のメンバーの相談についていけなかったけれど、何回かグループワークをして、全員の思考力、対人力を見つけ、メンバーと協力して課題を解決することができた。
- ・私が緊張した時、グループのみんなが「頑張れ。大丈夫」と励ましてくれ、そのおかげで頑張れた。

また、実習では実習記録やカンファレンス資料の作成など個人課題があるが、今回はそれに加えて実習計画書の立案や自助具作成を個人課題として行った。カンファレンス資料に関しては「非常に満足」とした学生は一人もいなかった（図9）。

学生の評価理由記述から、1回生は留学生が多く、日本語での文章作成に対して自己評価が低いこと、また、日本人学生でも文章表現が苦手としている学生が多いことが影響していると考えられる（評価理由記述6）。

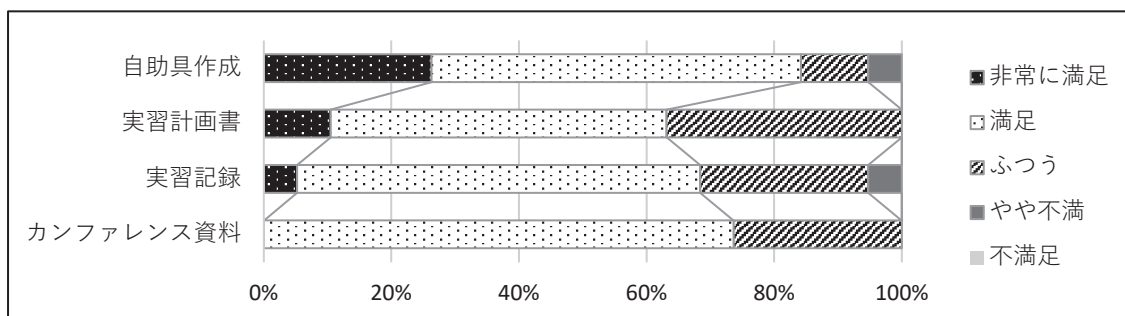


図9 個人課題について

評価理由記述 6 個人課題について（一部抜粋）

- ・細かい気づきなどをメモするように心掛けていたが、記録では、伝わりやすい文章でなかったり、誤字もあったりしたので改善していきたい。自助具は準備、発表と合わせてしっかりと行うことができ、クラス発表で様々な自助具と活用方法を知ることができた。
- ・自助具は、考えるのがとてもむずかしかったが、作る作業や作ったものを発表するのがとても楽しかった。実習の記録やカンファレンス資料の作成は、具体的かつ短くまとめなければいけないので、どういう文にするのかと考えるのが難しかった。
- ・一番問題は日本語なので、実習記録を書くときに間違いが多かった。また、具体的に書くことがまだ出来なかったと思う。私にとって、その場面はよくわかったが、記録する時、日本語で理解することが難しかった。しかし、頑張って記録を書いた。

(5) カンファレンス

実習期間の中間と最終日にカンファレンスを実施している。中間カンファレンスでは個人目標の達成状況の途中経過を、最終カンファレンスでは達成できたかの評価を報告しあい意見交換を行う。結果からは中間よりも最終カンファレンスで満足度が高くなり、カンファレンス実施運営にも慣れたことが、学生の評価理由記述からうかがえる（図10）（評価理由記述7）。

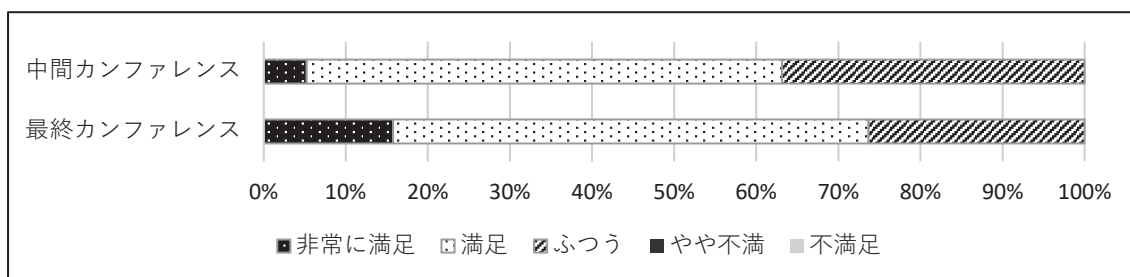


図 10 カンファレンスの実施について

評価理由記述 7 カンファレンスの実施について（一部抜粋）

- ・ 課題点や達成できたことについては発表できたが、質疑応答で答えた内容が理解されているのかが不安である。
- ・ 中間カンファレンスでは、グループでの準備が足りなかった。最終カンファレンスでは、反省点を踏まえスムーズに実施できたと思う。
- ・ 初めてカンファレンスなので、中間カンファレンスはうまく報告できなかったと思う。今回の最終カンファレンスはやっとうまく報告できたと思っている。カンファレンスを通して、出来なかったことや出来たことをはっきり理解できた。貴重なレッスンを引き続き行い、次回の実習の準備を整える。
- ・ 自分の学んだこと、次の課題が明確になった。

4. 考察

実習 I の主な目的・目標としては、施設の理解と利用者理解、そして場面に応じた生活支援技術の理解の 3 点である。急な学内実習への変更ではあったが、その点を留意しながら日々の演習課題を計画していった。アンケート結果を見ると全体的に満足度が高く概ね良好な評価であるため、代替実習として一定の役目は果たしたと考える。しかし、1 回生は学外実習の経験が全くないため、単純に学外施設で行われる実習と学内実習との比較はできない。学生の良い結果は、こちらが日々提供する課題を学生自身が上手くやり遂げたか、あるいは上手くできなかったという自己評価が満足度に反映されていると考える。

実習には、ただ単に介護現場で知識や技術を身につけてくるだけでなく、学生同士が互いに助け合い切磋琢磨しながらチームワークの構築を体験するのも学びの目的のひとつである。そのため今回は実習グループ単位での課題を設定した。グループワークの意義についてキャリア教育では「グループワークで求められるコミュニケーション能力、メンバーが役割を分担した上で相互に協力・協働して課題に取り組む姿勢、人の話を聴く力と自分の意見を述べる力、自分の意見を主張する力と他人の意見を受け入れる力、決められた時間内に課題を解決して答えを出す力等は、学生が社会に出てから活動するために必要な力である。」³⁾と述べられている。介護福祉士として現場の連携協働の方法を身につける点においてもその意義は大きく、コロナウイルス感染症は気になったが、学習の方法として全く外すのは難しかった。1 回生は入学後約 2 カ月間遠隔授業対応でクラスメイト同士の交流がほとんど無いままのスタートである。6 月からは対面授業となったものの、例年よりは期間が短い。また、ソーシャルディスタンスを強いられる中で何かを一緒にする機会も減っていたと考える。実習後に書いた振り返りのレポートでは、グループワークでのコミュニケーションの難しさについて述べている者が多かった。生活福祉コースの学生は年齢・性別・国籍も様々でお互いが持つ価値観も違うためか、なかなかチームとして一つにまとまらないグループも見られた。しかしながら、何度も繰り返し意見交換を行い、課題をやり遂げたことは、自分のコミュニケーションの課題に気づくとともに、学生同士が互いを理解し合い同じ学びを続ける仲間となる機会になったと考える。

また、今回の学内実習で一番の発見があったとすれば、模擬施設実習における 2 回生との関わりである。通常であれば、2 回生との交わりは実習報告会や事例研究発表会などの

場面で、実際に何かを一緒に取り組むという機会は少ない。しかし、2日間とはいえ2回生から直接アドバイスをもらう機会となり、1回生としては教員からの指導よりも身近で相談もしやすく分かりやすかったのではないかと考える。また、2回生は1回生の時に学外実習の経験があり、自分も迷ったり悩んだり、厳しい指導を受けた経験があるであろう。そのため1回生の気持ちがよく分かり寄り添うことができたと考える。そして、1回生の様々な質問に答えるために2回生自身も、今まで蓄えてきた自分の知識や技術を見直す良い機会になったのではないかと考える。植田寿之は「スーパーバイザーの権威を感じることがないので、メンバーにとって個人スーパービジョンよりも緊張感が低く、さらに、うまく機能させようとする、お互いの尊敬、認め合いが求められ、仲間意識をもって支え合い、育て合うこと、成長し合うことをメンバーと一緒に経験することができる。」⁴⁾とピアスーパービジョンについて述べている。まさしく今回の模擬施設実習での1回生と2回生の関わりはピアスーパービジョンの働きも担い、共に成長し合う効果的な学習方法であったと考える。

5. 今後の課題

今回振り返りを行い学生のアンケートからこちらが設定した演習課題に学生が真剣に取り組んだのが分かった。グループワークや模擬施設実習では学生同士での学び合いからの成長を見ることができた。特に、模擬施設実習は、実際の現場実習に行く前の実践的な学習として十分な役割を果たしたといえる。このような現場を再現したシミュレーション教育について医療系の教育現場では臨床能力を高める学習方法として導入されており、その方法について数多く研究がなされている。それらを参考に今後の演習内容も整えていく必要があるのではと考える。

コロナ禍以降、学内では Chromebook の導入によるオンライン授業の環境が整えられつつある。後日談ではあるが、1回生は介護実習Ⅱも学外施設での実習は取り止めとなり、学内実習を実施することとなった。その際、オンライン施設見学や介護過程ではオンラインビデオ会議で実習指導者から指導を受けるなど行った。今まで考えられなかった方法で実習施設との連携が可能となったのである。

こうした新たな取り組みも含め、万が一施設実習に行けない場合の代替実習にはどのような方法が相応しいか、教材づくりなど実習施設とも連携しながら検討していく必要がある。

謝辞

最後に、新型コロナウイルス感染症予防対策に大変な中、来学していただきご協力いただいた各実習施設の施設長ならびに実習指導者、職員の皆様に心から感謝申し上げます。また、模擬施設実習では多くの教職員の皆様に快くご協力いただき、貴重なご意見ご感想等を頂戴いたしましたこと、誠に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省：「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」、事務連絡 令和2年6月1日、https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2021.11.8)
- 2) 奈良佐保短期大学 生活未来科 生活福祉コース：『22期生 介護実習要綱』, pp.22-23 (2021)
- 3) 「大学等におけるキャリア教育実践講習」準備委員会：「Part2 キャリア教育の実践 第4章 グループワークファシリテーションの意義と実践」, 『大学等におけるキャリア教育実践講習テキスト』, キャリア・コンサルティング協議会, p.126 (2013)
- 4) 植田寿之：『日常場面で実践する 対人援助スーパービジョン』, 創元社, p.210 (2015)
- 5) 日本介護福祉教育学会：「特集 新型コロナウイルス感染拡大下における介護実習の現

- 状と課題」、『介護福祉教育』, 25 (1), pp.2-68 (2021)
- 6) 日本介護福祉教育学会：「特集 新型コロナウイルス感染拡大下における介護実習の現状と今後の可能性」、『介護福祉教育』, 25 (2), pp.2-41 (2021)

